
幻想のアルカナ

名無しの権兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想のアルカナ

【Nコード】

N9109Y

【作者名】

名無しの権兵衛

【あらすじ】

魔術師 それは己が願い、祈りを顕す術を会得した者らの総称。彼らは己が願望を成就させるためならば如何な犠牲をも厭わず、何ものをも顧みない。彼らはそういう存在であるがゆえに。

これはそうした異端者が紡ぐ、幻想の物語

来年一月末締切の第二回富士見ファンタジア大賞応募予定作です。厳しい批評お願いします> (――) <

第零話

夜。

街は寂とした空気に包まれていた。

日中は舗装された道路に忙しなく車が往来し、歩道には人の列が途切れることなく行き交い続ける。そんな人波の喧騒と車の騒音が街中を埋め尽くす栄えた都市は、けれどこうして夜が訪れるとスイッチが切り替わったかのように人が消え、音は途絶え、深閑となる。

ゴーストタウン。

簡易的な例えでこの街の様相を表現するなら、その言葉がもつとも適しているだろう。

そんな凍りついた街を俯瞰^{ふかん}する、天を刺さんとそびえ立つ摩天楼。その屋上のフェンスの向こう側に、一人の少年が座していた。

風にはためく薄手の赤いロングコート。右頬には血紅色^{けつじゅうごうく}のトライバルタトゥーのような紋様が刻まれており、体にはピアスやネックレス、ブレスレット等の装身具が多々身に付けられている。そして煙草。これらを見て、彼が学業に勤しむまじめな少年と思う者など、まず一人としていまい。

事実彼はそうした反社会的な性質を持っており、ゆえにこうしていまも関係者以外立ち入り禁止とされている屋上へ忍び込み街を一望している。それに対する理由など特にない。敢えて言うなればヒマ潰し。面白そうだからやってみた、というだけ。しかし、それもこうして果たしてしまうと途端に飽いてしまう。終えるまでの過程こそ楽しめたものの、やり切ると鬱屈するのはなぜだろう。

これは女を落とすのに少し似ているかもしれない。落とすまでは夢中になって口説くのに、いざ女が首を縦に振ると、今度はこちらが首を横に振ってしまいたくなる摩訶不思議な現象^{あれ}。大抵の男は

女もだが 一度くらいは経験したことがあるのではないか。

ちやうど、彼はいまそんな気分^{気分}に陥っていた。こんなビル^{ビル}の屋上

まで来て、一体何をしようというのかと。ただ帰るのが億劫になっただけ。それだけではないかと。

彼は現在、そうした自虐の念と、そして満たされない己が欲求に飢餓していた。

と、不意にポケットの中で何かが振動する。携帯だ。彼は億劫そうにしかめ面をしながら紫煙を吐き、やおらそれを取り出して画面を開く。そこに表示されているのは受信完了の文字。つまりメールだ。

受信ボックスを開いて、いま送られてきたメールを確認。送信者は、知り合いの小娘^{ガキ}だった。もうとうに零時を過ぎており、お子様が起きている時間ではないのだが、まあ、いまは春休み中ゆえ調子に乗って夜更かししているのだろう。それは分かる。誰もが共感する感情だ。

だが。

「……………」

苦笑が洩れる。

そのメールには、肝心の本文が書かれていなかった。ただ『事件ですっ！』という好奇心を無駄にくすぐる件名があるだけ。これでは何が何やらまるで分からない。

少年は仕方ねえな、とため息を吐きながら、電話帳を開いて送信者の少女へと電話をかけようとする。が、その直前、逆に電話がかかってきた。しかしそれは送信者の少女ではなく、また別の名前。違う女性だ。何とも騒がしい夜である。

通話ボタンを押し、携帯を耳に当てる。
すると。

『もしもし、遊路^{ゆうじ}？』

どこか焦慮の色を帯びた声がすぐさま鼓膜をノックしてきた。

常人ならばそこで不穏なものを感じ取り身構えるなり何なりするだろう。しかしこの少年 久我遊路^{くがゆうじ}は、相手を小バカにしている
としか思えない薄笑いを浮かべて。

「おー、どしたよ奏恵ちゃん、こんな時間に。夜のお誘いか？」

『……馬鹿なことを言わないで頂戴。あなたのおふざけに付き合っているヒマはないの』

「あらら、珍しく余裕ないのね。何かあった感じ？」

『何かなければあなたに電話なんかしないわよ。 単刀直入に言うわね。また起きたらしいわ、例の事件』

何ともつれないことを言ってくれるものだが、しかし遊路は特に気分を害さなかった。なぜなら、女などよりも遥かに楽しめるネタを持ってきてくれたのだから。

『襲われたのは学生五人。内三人は逃げ切ることに成功して通報してくれたようだけど、残りの二人は行方も生死も不明。私たちは取り敢えずその二人を探すから、あなたは犯人の方を追って頂戴』
「現場は？」

『三丁目の裏通り。襲われたのはつい三〇分ほど前らしいから、まだそう遠くへは行っていないと思うけど……』

「りょーかい。それで十分だ」

そう言って、通話を切る。

狩人というのは、一度定めた獲物を決して逃がしはしない。が、それでも逃げられてしまった場合は、別の獲物でその穴埋めをする。狩人にとって獲物は獲物であり、それ以外の何物でもない。ああ、つまり種が同じであればそれでいい、ということだ。人間も獲物の個性、特徴など、余程のことでもなければそう気にはすまい。それと同じ。

すなわち、その理屈で言うならば、いまこの瞬間にも街のどこかで誰かが理不尽な絶望を味わっているということになる。それを知りながら、しかし彼は微塵も同情などせず、義憤もしない。そんなことは己の知ったことではないから。

久我遊路が興味を持つものは、たった一つ。

「今夜の獲物は、どのくらい遊べんのかねえ……？」

その顔にはもはや鬱屈の色はどこにもなく。

ただ 抑え切れない喜悦の念を表した、引き裂けたような狂笑
だけが浮かんでいた。

第一話

人生において、人がもつとも輝きを放つ瞬間とは、やはり死する刹那だろう。

たとえば、重篤じゅうとくな病を患い余命いくばくもない人間がここにいたとする。そんな人間が、己が運命に悲憤慷慨ひふんかうがいするのではなく、懸命に生きて　そして逝く様は多くの人々に感動を与えるのではあるまいか。否とは言えまい。事実そのような人間を題材とした物語は数多く存在するのだから。

限られた時間を生きるからこそ、その死は美麗あわじなものとなる。そしてそれは、物語の中でのみ通用する概念ではない。現実でも、立派に生き諸人を魅了した偉人たちは数多くいよう。人々の生きる指針となった者らは幾多といよう。

であれば、やはり死は美しい。

そう思うのに、この時世、それを見る機会は極端に限られている。特にこの平和ボケした日本という国にいるのなら、殊更に。

ゆえに、彼女　比良坂黄泉ひりょうさかきよみは、いままさに死に吞まれかけんとしている者に手を差し延べはしなかった。

「あ、がつ……た、頼む……助けて、痛いんだよ……っ」

眼下から、呻吟しんぎんと懇願が入り混じった声が聞こえてくる。

冷たい地に伏しているのは、二〇歳そこらの青年。一体何があつたのか、全身傷だらけで血に塗れている。トラックにでも轢かれたのだろうか。

そんなことを思いながら、黄泉はガードレールに腰かけ先程向かいにある自販機で購入したコーヒを一口。青年の必死の願いにも、まるで意に介していない。ただその深淵のような無感情の黒瞳くくどうで彼を見下ろしている。

「は、あ……誰か、助けて……………」

もはや黄泉にどれだけ乞うても無駄と判じたのか、青年は他の者に救済を願い始めた。が、時刻はとうに零時を過ぎている。加え、最近この街 御門市みかとしでは無差別連続殺人という物騒極まりない事件が頻発しているのだ。ゆえ、人氣が失せたこのような時間に出かける者などほぼ皆無だろう。

「ああ……………」

と、そこで黄泉は思い至ったように。

「おまえ、例の殺人鬼にやられたのか？ 災難だったな」

まさに他人事のように訊ねた。

しかし青年は、弱々しく首を横に振って。

「ば、化物、に……………」

とそう返答してきた。

化物。化物？ と黄泉は小首を傾げる。件の殺人鬼は、人間ではないというのか。なるほど、最初の事件から一月経ったいまもまるで警察が成果を挙げられていないのは、そういう理由からだったのか。

「へえ……化物が相手じゃ、警察も大変だな」

どうでもよさそうな口調で呟く黄泉。けれど、彼女とてこの街にいる以上いつ襲われるかも知れない身だ、決して他人事ではない。が、それでも黄泉は動じない。殺人鬼・化物が潜む街。時刻はそれらが活発になりそうな闇の時間。そしてそれらに襲われたという瀕死の青年が一人。そんな常人ならば恐怖でパニックに陥りそうな状況に立たされているというのに、微塵も心を乱さないのは一体どういうことなのか。

それは言うまでもなく瞭然。

彼女が死を是とし、美と認識しているから。ゆえ、恐怖という感情が無いのだ。

端的に言ってしまうえば、人として壊れている。つまり異常者というやつだ。そんな人間に共感を求めても徒労に終わるだけ。

この青年が不運だと言うのなら、化物に遭遇してしまったことより、後に出逢ったのがこの生粋の死神たる彼女だったことがそうだろう。他の誰かならば、助かるかどうかは別としても、救うために動いてくれたらうに。

「あ、は……づっ」

ゴボ、と口から血の泡が零れ出る。もはや彼の死は秒読み態勢に入ったと、医学知識のない素人の黄泉ですら容易に見て取れた。

しかしやはり黄泉は何もしない。ただただ苦しむ青年を観察觀賞するように見ている。もはや彼に救いなどないだろう。もう半刻と持たぬだろうが、その最期の時まで嘆き続けるしかない。ああ、もしも霊というものが世に存在するのだとしたら、こうした者がそうなるのだろう。

だが、運命の悪戯か、あるいは神の慈悲か、奇跡は起こった。

「ん？」

サイレンの音が遠くから聞こえてくる。しかもその音がこちらへ近づいてくる。偶然、ではないだろう。ここには化物に襲われた負傷者がいる。その事件をどうやってか知ったとなれば、警察が黙っているはずがない。

黄泉はぐいっと一気にコーヒーを飲み干し、向かいに設置されている自販機、その隣に置いてあるゴミ箱へ缶を投げ入れて。

「じゃあ、私は行くよ。達者でな」

腰を上げ、その場から離れる。別段疾しいことなどないのだが、事情聴取だの何だのと警察に拘束されるのは御免だ。面倒臭い。

「あ……ぐ、あ……ま、待つ

」

去り際、微かに聞こえていた呻き声が唐突に止んだ。

それでも、彼女は振り返らなかった。

瀕死の青年がいた場所から道なりに一〇数分歩いたが、その間誰一人として見かけることはなかった。街は凍りついたように静まり

返り、悄然とした空気が満ちている。まさに死の街そのものの様相を呈していると言えよう。

(……化物、か)

あの青年は言っていた。化物に襲われたと。

普通に考えれば、重傷を負い錯乱していたがゆえの戯言　そう取るのが自然だろう。人は未知なるものを求めながら、自分に害する未知だけは頑なに認めようとしない生き物だから。

それは恐怖から生じた感情。誰もが持つ自衛の願望。しかし、前述の通り彼女にはそのような感情が無い。ゆえに、信じたとまではいかないまでも、頭ごなしに否定してはいなかった。というより、どちらでもいい、どうでもいいと思っている。そんなものになど、比良坂黄泉は微塵の興味もないから。

彼女が関心を持つのは、たった一つだけ。

しかし、その願望は人類という種の大半に受け入れられないもの。ゆえに、彼女は常に無聊していた。特にここ一〇年はそうだ。誰一人として、彼女の存在を認可した者はいなかった。というより、比良坂黄泉という人間が生まれて一八年、その間彼女の存在を認めたのは、たった一人の少年だけだ。

実は彼女、一度この街からちよつとした事情で離郷しており、そして帰郷したのがつい一月半ほど前。つまり、ちょうど彼女が戻った直後辺りに、この連続殺人が起こり始めたのだ。不幸と言えば、不幸だろう。彼女は特に何も感じていないが。

ともあれ、事件が起きてなお彼女がこのように出歩いているのは、一〇年前唯一彼女を認め、そしてその在り方に共感し合えた少年を探しているがゆえ。

だが、一〇年振りに帰郷し、いの一に彼が当時住んでいた自宅へ訪れてみれば、そこには別の家族が住んでいて、当の本人は未だ行方知れず。もしかしたらもうこの街にはいないのかもしれないというより、家を売り払っていることを考えれば、そうと考えるのが自然だろう。

しかし、それでも彼女は探していた。別に彼に恋慕していたわけではないが、会えるものなら会いたいと思っている。……まあ、やることがないから、というのが第一の理由なのだが。

「……あいつは、どこにいるんだろうな」

そして何をしているのか。

一〇年前の彼ならば、いま街を騒がせている殺人鬼にも恐れず関わろうとするだろう。あの少年はそういう怯懦きょうたとは無縁の、危険嗜好の性質を持っていた。ゆえに、黄泉は敢えて殺人鬼が動きだしそうな夜間の散策を行っているのだが　結果はご覧の通り。さすがに辟易してしまう。

小さくため息を吐くと、不意に視界の端にコンビニが見えた。立ち止まってしばし黙考し、ややあつて気分転換に何か適当な飯でも買おうと決を出す。いわゆる一つのヤケ食い、というやつだ。

無人の道路を横断し、コンビニに入る。暗闇に目が慣れていたせいか、店内の照明がいささか眩しく、そして外界の不穏さを笑い飛ばすような軽やかなBGMが流れている。ああ、ある意味では、ここは年中無休で人々に日常という普遍の安堵を与える憩いの場なのかもしれない。

さて、と黄泉はまず軽く店内を見渡す。特に意味はない。何となくだ。しかし、黄泉はその何となくから先の行動をしなかった。否、できなかった。

なぜなら　店内の至る所に飛び散っている鮮血が見えたから。

天井、床、壁　入り口からでも見えるほど広範囲に飛散しているそれは、紛れもなく人の血、それである。仮に凶悪な強盗犯が現れ殺人に踏み込んだのだとしても、こうはなるまい。ゆえにこれは異常。常識セカイから逸した、魔的な光景だ。

しかし。

「……………」

無言。常人ならば悲鳴を上げて然りのはずだが、けれど黄泉は悲鳴どころか表情すら変えることはなく、ただ泰然と佇立していた。

ほどなくして、ゆつくりと黄泉が動き出す。急くでもなく、躊躇するでもない、自然な足取りで奥へと進んでいく。

すると、何かを噛み砕くような、そんな音が聞こえてきた。いや、砕く音だけではない。何かを引きちぎるような音もまた。

まともな神経の持ち主ならば、ここで引き返すことを選択しただろう。あるいは警察に通報するか、もしくは真相を確かめんと恐怖に耐えて進むか、そのいずれかだ。それで言うなら、黄泉が選んだ選択肢は三つ目ということになる。だがしかし、どういうわけか、歩を進める度に無であつた彼女の表情が、恐怖ではなくどこか笑みの形に歪んできているような……

そして。

彼女は、『それ』と遭遇する

「……………、ア？」

血だまり。その中で、血塗れの肉塊を抱きしめるようにして貪る、人間のような姿をしたモノがそこにいた。

「ナンダア、オマエ？　ダレダア、テメエ？　ナニシニキヤガッタ？」

爬虫類のような無機質な金色の瞳が黄泉を捉える。口元は血でベツトリと濡れ、爪牙は人間のものとは思えない、さながら獰猛な肉食獣の如く鋭利。そしてその肉体は筋骨隆々たる毒々しい黒々とした体表。そのような異形の『それ』が喰らっているのは、原型こそ留めていないものの、けれど間違いなく人間^{ひと}であつた。

さて、これらを踏まえて、果たして『それ』を人間であると思える者はいらるうか。いやいまい。いるはずがない。如何な痴愚^{ちぐ}であろうと見紛わないだらう。黄泉もそうだった。これは人ではない化物、怪物、妖魔の類であると。

「ソウカ……オレヲコロシニキタンダナ……アノカタノチヨウアイヲウケテイルオレヲネタンデッ！！」

妖魔が吠える。その瞳に宿るは激甚な憎悪。いや　あるいは恐怖か。凄まじい被害妄想に捕らわれている魔性の怪物は、ゆえに視

界に入った人間をその肉塊のように殺してきたのだろ。ああ、もしかしたら先程出会った青年、あれもこの妖魔にやられたのかも。そして今度は己の番。

しかし、それを理解した上で黄泉が見せた反応は……

「へえ……滓徒か。ほとんど壊れてはいるけど、最低限機能はしてる……なるほど、件の殺人鬼の正体は、凄腕の魔術師ってわけだ」
まるでちよつとした謎を解き明かした子供のような、そんなしたり顔を浮かべていた。

それに、妖魔は。

「コロス……コロスコロスコロスコロスコロスコロス　オ
レヲコロソウトスルヤツハ、ドイツモコイツモブチコロシテヤル

ッ……」

響き渡る絶叫にも似た咆哮、その凶念の波動が残らず店のガラスを砕き陳列棚を薙ぎ倒した。が、しかし黄泉は仰け反らない。如何な暴風にも揺るがぬ不動の巨木の如く、彼女は微塵も気圧されていなかった。

その顔に浮かぶは喜悦の笑み。どこまでも淫靡いんぴでおぞましい、魔性の微笑。

仮にこの場に第三者がいたとするならば、果たして一体どちらを化物と呼んだであろうか。

妖魔が雄叫びを撒き散らして突貫してくる。

それはさながら巨大岩石の轟進ばくしん。ゆえに、人間の柔な体であれを食らえばひとたまりもない。ただ惨たらしい轢殺死体れきさつと化すのみ。

だが黄泉は逃げず動かず、ただ自然体のまま

「
無間乖離むげんかいり」

死あわりの言霊を紡いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9109y/>

幻想のアルカナ

2011年11月27日19時57分発行